



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

児童の季節認識と言語活動： 小学校5年生における詩表現の分析から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-02-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋,萌, 澤田,康德, 牧岡,俊夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166635

児童の季節認識と言語活動

—— 小学校5年生における詩表現の分析から ——

高橋 萌^{*1}・澤田 康德^{*2}・牧岡 俊夫^{*2}

地理学分野

(2020年8月24日受理)

要 旨

言語活動の充実は、書くことや話すことなどの表現能力の育成にとって重要であり、気候変動時代の現代において、気候に関連した自己の情緒や考えの表現および発信する機会が増大している。本研究では、言語活動の一つで情緒表現が重要な詩の表現と季節認識の関係を明らかにし、情緒表現育成の手がかりを把握した。東京都小金井市の小学校5年生(34名)を対象とし、アンケートにより①季節や自然に対する関心、②季節に対する情緒(5段階得点)に対してWard法によるクラスター分析を施し季節認識を類型化した。その上で詩の特性を論じた。季節・自然に対する関心と情緒の程度は3つに類型化された。自然に対する関心が高く、ポジティブな情緒を持つgroup1、関心の高さがそれに次ぐgroup2、および関心や情緒は最下位得点割合が大きいgroup3である。詩表現は、いずれの類型も各季節で季節名の割合が最大を示すが、group1では、木、花、風、海などの自然を構成する要素の割合が大きい。group2では、季節に関連する語句や擬態語の割合が大きく、夏の詩には生活事象の語句が認められる。group3では生活事象の割合が大きい。関心事象はgroup1と2で自然関連事象、group3で生活関連事象の割合が大きく、後者で季節を感じる機会が少ない。季節や自然に対して関心が高い場合(group1, 2)と生活事象に関心が高い場合(group3)とも、関心程度の高い事象を用いて季節感や情緒を詩で表現している。関心が高い場合に季節のイメージは多くの要素から構成され、関心が低い場合に季節を感じる機会が限定的である。したがって、季節や自然に対する関心の高まりは、イメージを豊かにすることや季節を感じる具体的機会と連関し、季節感や情緒の表現に重要である。

キーワード：季節認識、言語活動、詩、小学生

1. はじめに

気候学習は、地理教育を主体に社会科関連の教科教育で多数の議論がなされている。社会は大気の平均状態である気候への対応や活用を行う中で成り立っている。したがって気候は大気の学習にとどまらず、元来横断学習の要素をもっている。

たとえば、書くことや話すことなどの表現能力の育成として言語活動が重要な位置を占める国語教育にお

いて、人や自然、国家などを相対化し、自他の関係性を認識する学習が経験主義国語教育の本質であり(坂口2003)、明治期においても国語読本に気候の描写が学習内容であることが示されている(田中1981)。すなわち、戦前や戦後すぐにおいても言語活動では、気候や季節は重要な要素であったと考えられる。

近年では、理科教育におけるアーギュメント構成能力の育成に関しても言語活動の重要性が論じられている(山本・神山2016)。また、気候変動などを学習内

*1 埼玉県和光市役所(351-0192 埼玉県和光市広沢1-5)

*2 東京学芸大学 人文科学講座 地理学分野(184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

容に含む環境史における言語活動の重要性(田尻 2011)からも、気候変動時代の現代において、自己の情緒や考えの表現および発信する機会や重要性が増大してきたと考えられる。

一方、気候が関連する季節の捉え方などの季節認識は、社会や生活の気候適応と密接で、いくつかの観点から研究がなされてきた。主要な観点は、季節や気候を判断する要素や要因に関する研究である。たとえば、幼児の絵に描かれる季節について、読み取りや幼児の語りの分析から、幼児の季節判断の要素として色相・明度、衣類、固定化されたイメージ、自己の経験があることが示されている(佐藤 2019)。さらに、中学生では四季を認識する指標として気象変化を踏まえており、それと中学生の四季の気温や降雪に対する意識の高さとが関連づけられている(齊藤 2003)。また、このような季節認識に関わる気温については、児童に関する調査によって、的確な気温の判断は、具体的な体験と季節の認識と合わせて獲得される傾向が確認されている(加藤・澤田 2014)。

さらに、学習効果に関する研究においても季節認識が論じられている。小学生における季節の捉え方は、都市ビオトープを用いた自然体験教育実践を行うことにより、土壌生物に対するイメージや意識の変化のほか、環境に対する感受性の高まりが効果として現れることが示されている(塩俵・安藤 2013)。この自然体験は、幼児においては、継続的体験が「生きる力」の心理的社会的能力や身体能力を向上させることが実践結果から報告されている(中川ほか 2019)。そして、自己表現力について、自然体験によって児童は自然からの学びと体験からの学び、これらが相互に作用し、発見や関心を高め、五感の活用、自己表現力の育成へ効果があることが指摘されている(向坊・城後 2006)。

このように、季節認識やその背景としての自然体験に関する研究は、季節認識に関わる要素や教育実践の効果について議論がなされてきた。一方で、子どものあそびは季節変化や経年変化があり(佐川 2001)、近年は、地球温暖化などによる気候変動も明瞭になってきている(藤部 2013など)。したがって、季節認識の把握は子どもを取り巻く季節の環境論の基礎的情報として重要である。かつ社会対応を念頭とした従前の季節認識に関わる要素や季節・自然に対する関心や認識のほかに、気候変動時代には情報を獲得するだけでなく、自己の情緒や考えの表現および発信する力の育成が強く求められてきていると考えられる。しかしながら、幼児期から論じられている季節認識について、言

語活動と季節認識との関連性は明確ではない。季節認識やその背景を踏まえた言語活動の議論が必要であろう。本研究では、児童における言語活動の一つで情緒表現が重要な詩の表現と季節認識の関係から、情緒表現育成の手がかりを把握する。

2. 研究方法

2. 1 調査対象者について

調査対象者は、東京都小金井市の小学校5年生の34名である。児童の居住地は、東京都内の区部から多摩地域にかけて広域である。また、アンケートの実施時期(2018年3月下旬)までに、身近な地域や都スケールの自然環境の学習を一通り終えている。学習内容としての身近な地域と児童の居住地は異なるが、都スケールの自然環境は共通した既習内容である。そのほか、児童の共通した学校生活内容として、学習、学級活動、学校行事がある。学習については、国語、理科、社会、理科、総合的な学習の時間において題材として動植物の生活や自然について扱ったり、直接触れたりしながら認知や思考力および判断力を育成している。学級活動では、係活動の一環で自然と関わること(お天気係など)や、学級内での季節に合わせたお楽しみ会やイベントが行われている。学校行事では、各季節に合わせた祭りや、4年生から毎年郊外で宿泊を伴う自然体験がある。

2. 2 アンケートについて

児童の季節・自然に対する関心や情緒を把握するために、アンケートを2018年3月下旬に実施した。質問内容を表1に示す。

質問1は、児童の季節(1)・自然(2)に対する関心と情緒に関する質問を設定した。質問2は、季節の感じ方についてである。質問1と質問2の回答方法は程度についてで、そう思わない、あまりそう思わない、どちらとも思わない、まあそう思う、そう思う、以上の5つを数直線上に示し、程度を選択回答によって得るようにし、それぞれ1点～5点とした。

質問3は、季節の変わり目の認識について、自由記述で回答を得た。質問4は、児童のこれまでの自然体験の頻度について、質問5はその場所の特徴について問うた。質問6では、季節から思いうかぶ言葉として、夏と冬について問うた。質問7では、関心のある事象について複数回答可能な選択式で問うた。回答は、担任の教諭が質問を読み上げながら進め、約20分で行った。

質問1および2の回答は数値で得られる。このような間隔で得られる数値は、間隔尺度として用いられている（内田 1986 など）。そこで、本研究でも同様に間隔尺度とみなした。

そして、児童の季節・自然に対する関心と情緒の系統的特徴をとらえるために距離を平方ユークリッドで定義し Ward 法によるクラスター分析を行った。

表1 アンケートの質問内容

質問1（5段階評価）

次のことについて最も当てはまると思うものを選び○で囲んでください。

- 1 季節について興味がある
- 2 自然について興味がある
- 3 春（夏，秋，冬）が好きである
 - 春（夏，秋，冬）は優しい
 - 春（夏，秋，冬）は不安だ
 - 春（夏，秋，冬）は楽しい

質問2（5段階評価）

以下の季節を感じながら生活していますか。その程度を○で囲んで下さい。

春 夏 秋 冬

質問3

どんな時に季節の変わり目を感じますか。思いつくだけ書いてください。

質問4

自然が豊かな場所にどれくらい行きますか。

年に（ ）回くらい

質問5

その自然が豊かなところで、よく行く場所はどこですか。

質問6

次の言葉からどんなイメージがわかりますか。思いつくことを書いてください。

夏 冬

質問7（複数回答可）

次の言葉で興味があるものを全て選び○で囲んでください。

木 人 空 水 花 葉 気温 色 虫
動物 日光 虫 音 石・岩 時間 空気 山
川 海 地面

2. 3 詩について

児童の情緒表現の資料として、各季節に描かれた詩を用いた。児童は詩を書く前に1時間程度学校敷地内を散歩し、その後一単位時間（45分）で書くようにし、時間内に完成しない場合宿題として完成させている。詩の形式や条件はなく、絵を描くことについての指示はしていないが、児童によっては詩の作品の背景として内容に合わせた絵を描いた作品もある。

描かれた季節は、春、夏および冬についてである。記述時期は、春は4月、夏は6月、冬は12月～1月で計102作品である。秋については、教育課程の都合上、詩を書く活動は行われなかった。

3. 児童の季節・自然に対する関心と情緒

3. 1 関心および情緒の全体的傾向

季節・自然に対する関心の概要として、質問1の得点別回答割合を図1に示す。得点が上位であるほど関心の程度が高く、5点、4点、3点、2点、1点をそれぞれ最上位、上位、中位、下位、最下位得点とする（質問2も同様とする）。

全児童のうち、季節に対する関心については65%が上位得点以上（4点、5点）を示し、自然に対する関心は90%以上の児童が上位得点以上を示す。したがって、学級全体としては季節および自然に対する関心が高い。

さらに季節と日常の近接性や親和性を知るために、図2に季節を感じながら生活している程度に関する得点別割合を示す。いずれの季節においても上位得点以上の割合が半分以上を占めている。特に、夏および冬は最上位の得点割合が大きく、春に比べて日常との近接性が強い、あるいは感じやすいことを意味していると考えられる。

次に、自然・季節に対する関心、季節に対する情緒（好き・優しい・不安・楽しいと感じる程度）の得点

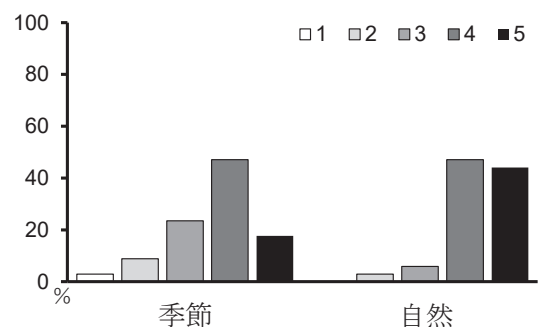


図1 季節および自然に対する関心の得点別割合は対象者総数に対する百分率である。

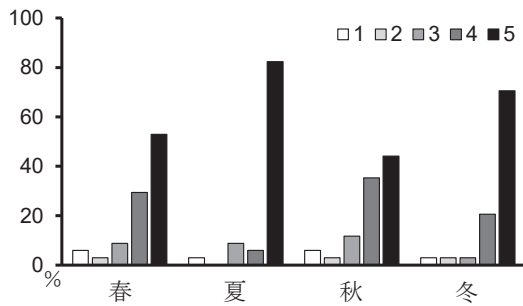


図2 各季節の日常生活における季節感の程度
値は対象者総数に対する百分率である。

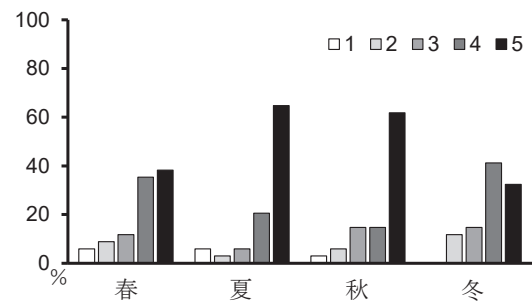
別割合を図3に示す。「a 好きである程度」「d 楽しいと思う程度」については、いずれの季節においても上位得点以上の割合が大きく、「c 不安だ」について下位以下の割合が大きい。すなわち、全体的にはいずれの季節に対してもポジティブな情緒をもつ児童が多いと考えられる。一方、「b 優しい」については春、秋では上位得点以上の割合は大きいものの、下位および中位得点の割合が半分を占めている。また、夏や冬は、春や秋と比べて得点の明瞭な極大は認められない。

3. 2 関心および情緒の類型化

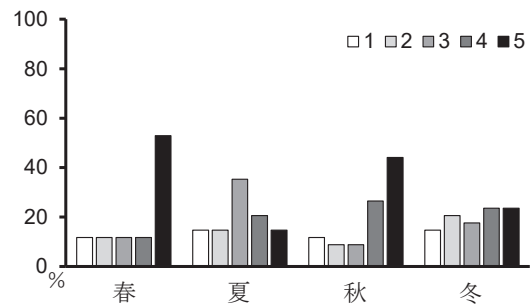
以下では、児童個々の関心および情緒の系統性を捉える。そこで、質問1の自然や季節に対する関心、季節に対する情緒の5段階の得点に対してクラスター分析を行った結果を示す。なお、環境認識に関わる系統性の把握に、多変量解析の一つであるクラスター分析が多く用いられている（井元ほか 2001、内田 1986 など）。

図4はクラスター間の距離と結合過程を示す。クラスター分析では、得点間の類似度を距離で定義し、クラスター間の距離が近いものから結合していく。さらにグループ化を繰り返し、最終的に全児童を一つのグループにまとめる方法である。クラスター間の距離の指標が大きくなり、情報の損失が多いと考えられる3個目の箇所では結合を中止した。図の破線部分で結合をやめ、結果として3つに類型化した。group1は12人、group2は15人およびgroup3は7人で、最小のgroup3で20%以上であった。

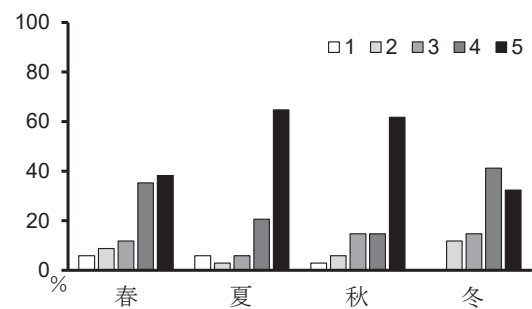
図5には、クラスター分析に基づく季節・自然に対する関心および情緒の得点別割合を示す。全体的には、group1は上位得点以上の割合が大きく、group2は上位および中上位得点の割合が大きい。group3は最下位～中位得点の割合が大きくなっている。季節(1)と自然(2)に対する関心程度に着目するとgroup1は自然に対して最上位得点割合が最大を示す。



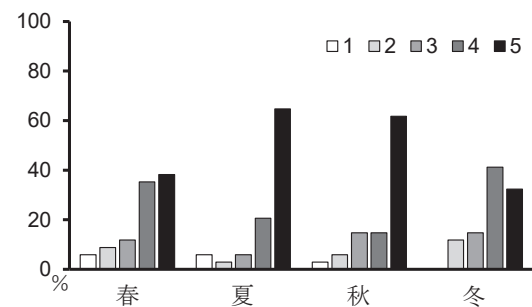
a 季節を好きである程度



b 季節を優しいと感じる程度



c 季節を不安だと感じる程度



d 季節を楽しんでいる程度

図3 季節に対する情緒に関する得点別割合
値は対象者総数に対する百分率である。

group2と3の最上位得点割合に大きな差は認められないが、group3では最下位得点が認められる。季節に対しては、自然に対してよりいずれの類型も最上位得点割合は小さいが、group1でやや最上位得点割合が大きい。季節に対する情緒(3～18)は、group1で不安と感じる程度は最下位得点割合が全類型中最

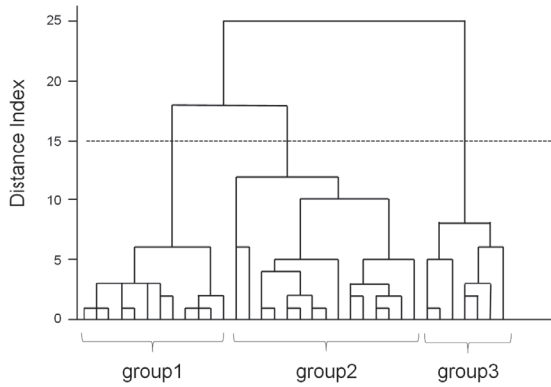


図4 クラスターの結合過程
縦軸は、指標となる距離を示す。

大で、そのほかの好きな程度（3～6）、優しいと感じる程度（7～10）、楽しいと感じる程度（15～18）は最上位得点割合が大きい。一方、group3では優しいと感じる程度で最下位得点割合が全類型中最小である。それ以外については最上位得点割合が小さい。group2は、中位得点割合が大きい。

これらのことから、group1は特に自然に対する関

心が高く、季節に対しても比較的関心が高い。季節に対する情緒としてポジティブな面をもっていると考えられる。また、group2は季節・自然に対する関心の高さはgroup1に次ぎ、group3は他のgroupに比べ季節に対する情緒的意識は高くない傾向にあると考えられる。

なお、季節の好きな程度（3～6）は、group1では夏で最上位得点割合が小さいのに対し、group2および3では最大を示すことから、季節に対する情緒も類型によって異なっていると考えられる。

4. 児童の詩表現

季節に対する関心と情緒の特性および言語活動の一つである詩表現との関係をとらえる。詩の基本的構成を知るために、表2に春、夏、冬の詩について、文章の文字数の平均と語句の種類数を示す。語句は、詩の文章を単語で区切り、区切った単語のうちから助詞と指示語を除いたものとした。語句の種類数を各類型の人数で除し、それぞれの語句の人数に対する割合を求

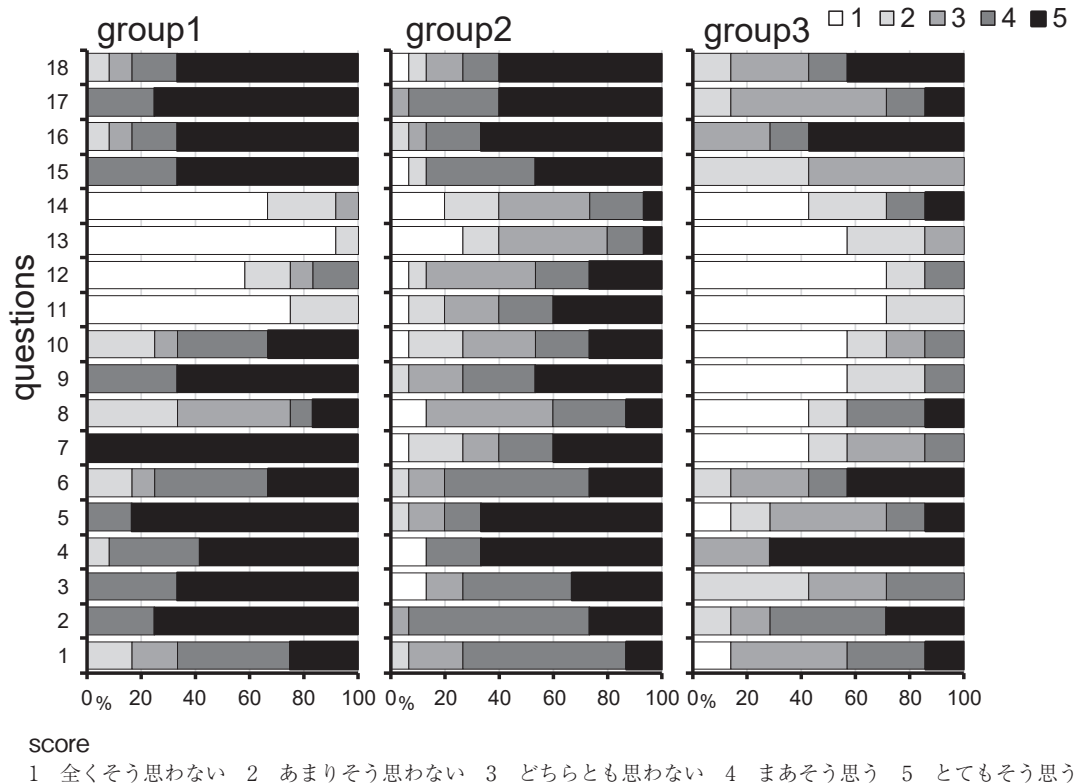


図5 季節に対する関心と情緒に関する得点別割合
値は対象者総数に対する百分率である。

表2 詩の文字数の平均と語句数

		group1 (12)	group2 (15)	group3 (7)	計
文字数平均	春	108.3	90.3	73.7	272.3
	夏	104.4	102.3	71.9	278.5
	冬	102.1	93.1	90.1	285.3
語句数	春	221	271	95	587.0
	夏	204	230	92	526.0
	冬	219	253	127	599.0
語句数／人数	春	18.4	17.0	18.3	53.7
	夏	18.1	15.3	16.9	50.3
	冬	13.6	13.1	18.1	44.9

語句は助詞と指示語を除く。

めた。平均文字数はいずれの季節においても group1, 2, 3 の順で減少している。語句の種類数はいずれの季節においても group1 が最大を示す。

次に、高頻度で確認される語句として、表3に割合が50%以上の語句を類型ごとに示す。いずれの類型も各季節で季節名（春、夏、冬）の割合が特に大きくなっている。その他の語句については類型によって特徴が異なる。

春の詩では、group1 と group3 は、植物に関連する語句が多く用いられ「桜」の割合が「春」よりも大きい。さらに group1 は、「きれい」や「あたらしい」、「おちてくる」といった事象の形容表現や状態を表す語句、「私」といった主体となる語句も多用されている。group2 では、「ひらひら」といった擬態語や「みんな」といった主体となる語句も用いられている。

夏の詩では、group1 は「緑」や「木」、「海」、「風」など自然を構成する事象である語句の割合が大きい。group2 と group3 では「夏休み」と「水泳」といった夏の生活に特有な事象に関連する語句が用いられている。また、group2 では「ドドーン」といった擬音語と、「草木」や「そら」といった自然を構成する事象の語句も用いられている。

冬の詩では、group1 は夏と同様「木」や「風」、「葉っぱ」などの自然を構成する事象となる語句に加え、「夏」の他の季節名や「シャキシヤキシヤキ」の擬態語が多く用いられている。group2 は「冬」と「雪」のみが50%を上回っている。group3 は、季節に関連する語句が多く、「寒い」といった気温に関わる語句も用いられている。

このように3つの季節の詩の表現から、group1 では、自然を構成する事象の割合が大きく、group2 では、季節に関係する語句や擬態語の割合が大きいことが分かる。また、group3 では、季節や植物に関する語句やそれぞれの季節の生活に関連する事象の語句の割合が大きくなっている。

ここで児童の詩表現の特徴についてまとめると、文字数平均、および語句種類数ともに group1 で最大、次いで2, 3の順であり、語句の特徴としては、group1 が自然に関連する語句、group2 は季節に関連する語句や擬態語、group3 は生活に関連する語句や季節に関連

表3 類型ごとの詩表現で用いられる上位頻度語句とその割合

	group1 (12)			group2 (15)			group3 (7)		
	語句	語数	割合(%)	語句	語数	割合(%)	語句	語数	割合(%)
春	桜	24	200.0	春	25	166.7	桜	12	171.4
	花びら	13	108.3	桜	20	133.3	春	10	142.9
	春	12	100.0	風	11	73.3	サクラ	9	128.6
	毎年	11	91.7	ひらひら	9	60.0	たくさん	5	71.4
	きれい	10	83.3	みんな	8	53.3	びゅんびゅん	4	57.1
	花	10	83.3				ぼく	4	57.1
	私	8	66.7				花	4	57.1
	お花	7	58.3				花びら	4	57.1
	色	7	58.3				木	4	57.1
	あたらしい	6	50.0						
夏	おちてくる	6	50.0	夏	45	300.0	夏	11	157.1
				夏休み	10	66.7	ひまわり	6	85.7
	夏	22	183.3	ドドーン	8	53.3	たくさん	4	57.1
	緑	12	100.0	空	8	53.3	みんな	4	57.1
	木	9	75.0	草木	8	53.3	夏休み	4	57.1
	海	8	66.7				水泳	4	57.1
	風	7	58.3						
	雨	6	50.0						
冬	草	6	50.0	冬	45	300.0	冬	12	171.4
	冬	32	266.7	雪	8	53.3	季節	10	142.9
	木	11	91.7				来る	10	142.9
	ない	8	66.7				寒い	7	100.0
	シャキシヤキシヤキ	6	50.0				正月	6	85.7
	なる	6	50.0				雪	6	85.7
	夏	6	50.0				時	4	57.1
	風	6	50.0						
	葉っぱ	6	50.0						

助詞と指示語は除く。割合は類型ごとの総人数に対する語句の頻度(%)である。

する語句が多く用いられる。

5. 児童の季節認識と自然体験

さらに、これまで示した児童の季節・自然に対する関心や情緒の形成や詩表現の背景を知るために、児童の過去の経験や関心事象について考察する。

表4は、季節の変わり目を感じる機会について、自由記述の内容を分類し、項目ごとの割合を示した。

記述は自然に関連するものと生活に関連するものに大きく分けた。いずれの類型においても自然に関する記述が多く認められた。たとえば、group1、2は気温、group3は植物に関する記述が特に多い。季節の変わり目を感じる事象のうち、気温は目に見えない不可視的事象で、植物は目に見える可視的事象である。植物はgroup1でも41.7%である。したがって、group1は不可視的事象および可視的事象の両者が、group2は、不可視的な事象、group3は可視的な事象が季節を判断する主要な事象であると考えられる。

表5に質問6の夏(冬)という言葉から抱くイメージに対する回答結果を示す。記述は表4と同様に自然に関連する事象、生活に関連する事象に大きく分けた。さらにそれに分類されない語句内容が季節の変わり目で確認されないものも複数あり、それらをその他に分けた。夏および冬において、いずれの類型においても自然に関連する事象よりも生活に関連する事象が多く認められる。不可視的な事象である気温が関わるものとして夏では「暑い」、冬では「寒い」といった気温についての記述が最大である。group3ではイメー

ジを構成する内容の出現割合が大きくない。

また、季節イメージと季節変化を感じる機会とよく対応しているわけではないが、類型ごとに傾向は異なっている。

図6に質問4の自然の豊かな場所への訪問頻度について、人数の割合を示した。なお、0回、15回以上19回未満の回答は認められなかった。平均回数ではgroup1が5.7回、group2が6.1回、group3が5.5回である。それぞれの階級の割合は、group1と2は類似しており、5回以上10回未満が最も大きくなっているが、group3では1回以上4回未満、10回以上14回未満が大きくなっているためばらつきが大きい。自然

表5 夏(上)と冬(下)のイメージの項目ごとの記述出現率

		group1 (12)	group2 (15)	group3 (7)
自然	動物	25.0	40.0	42.9
	植物	8.3	0.0	0.0
	気候	83.3	73.3	28.6
	その他	58.3	73.3	14.3
	計	175.0	186.7	85.7
生活	夏休み	41.7	40.0	42.9
	イベント	0.0	6.7	0.0
	食べ物	66.7	40.0	14.3
	スポーツ	50.0	66.7	42.9
	学習	8.3	13.3	0.0
	体験	25.0	40.0	28.6
	その他	50.0	26.7	28.6
その他	計	241.7	233.3	157.1
	色	16.7	0.0	0.0
	感情	8.3	6.7	0.0
	状態	25.0	13.3	14.3
	計	50.0	20.0	14.3

表4 季節の変わり目を感じる機会

		group1 (12)	group2 (15)	group3 (7)
自然	植物	41.7	26.7	71.4
	動物	25.0	20.0	14.3
	空	0.0	6.7	0.0
	太陽	0.0	0.0	14.3
	空気	0.0	0.0	14.3
	水	8.3	0.0	0.0
	気候	25.0	6.7	28.6
	気温	66.7	80.0	14.3
	計	166.7	140.0	85.7
生活	衣服	8.3	20.0	0.0
	体験	16.7	6.7	0.0
	学校生活	0.0	6.7	14.3
	日の長さ	8.3	20.0	0.0
	町の様子	0.0	6.7	0.0
	気分	8.3	0.0	0.0
	体調	8.3	20.0	14.3
	計	216.7	160.0	157.1
その他	色	8.3	6.7	0.0
	感情	8.3	6.7	0.0
	状態	8.3	6.7	0.0
	計	25.0	20.0	0.0

値は、各類型の総人数に対する百分率である。

		group1 (12)	group2 (15)	group3 (7)
自然	動物	8.3	6.7	0.0
	植物	8.3	0.0	0.0
	気候	150.0	126.7	85.7
	その他	0.0	6.7	0.0
	計	166.7	140.0	85.7
生活	冬休み	33.3	13.3	28.6
	イベント	58.3	80.0	14.3
	食べ物	25.0	6.7	14.3
	スポーツ	16.7	13.3	14.3
	学習	16.7	6.7	28.6
	体験	41.7	40.0	42.9
	その他	25.0	0.0	14.3
その他	計	216.7	160.0	157.1
	色	8.3	6.7	0.0
	感情	8.3	6.7	0.0
	状態	8.3	6.7	0.0
	計	25.0	20.0	0.0

値は、各類型の総人数に対する百分率である。

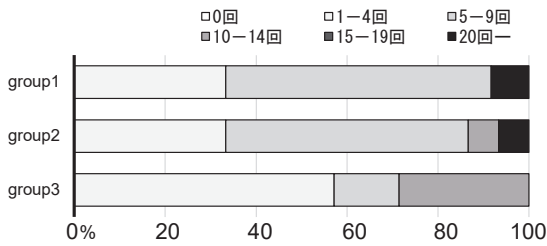


図6 類型ごとの自然体験の階級別割合
体験数は1年あたりの回数である。

が豊かでよく行く場所としては、旅行先など各家庭の中において経験していることの記述が多く認められた。

図7に質問7の自然などに関連する言葉のうち関心のある事象についての回答結果を示している。複数回答とし、回答割合の合計を求めた。group1は833.3%, group2は760.0%, group3は471.1%と自然・季節に対して関心が高い類型ほど回答数が多い。いずれの類型においても「動物」に対する回答が最大を示している。特にgroup1は90%を超え全類型中で最大を示す。group3は「人」、「色」、などの生活事象についても「動物」と同じく割合が大きく、詩表現や季節のイメージの記述で認められたように自己の生活と関連する事象に対する関心が高いと考えられる。

詩表現との対応は、自然（質問1-2）や自然事象に対する（質問7）関心程度が高いgroup1では、詩において自然事象が多用される。生活事象（質問7）に関心が高いgroup3では、詩においても生活事象が表現として多く用いられている。

以上の結果をまとめると、季節・自然に対して関心の高い場合（group1, 2）と生活事象に関心が高い場合（group3）に、詩において自然事象と生活事象を

主体に表現しており、基本的に事象に対する関心は詩表現と関わっていると考えられる。ただし後者は、季節を感じる機会が限定的である。季節を感じる機会の系統性が、詩表現に現れる語句の系統性と一致していたわけではないが、本研究では、自然・季節に関心が高い場合（group1）に不可視的および可視的両者の事象によって季節を認識し、それに次ぐ関心を示す場合（group2）は不可視的事象、関心が高くない場合（group3）には可視的事象が季節の認識事象の主体となっている。気候事象は不可視的であることや平均状態であることが教材特性である（澤田 2008）。本研究結果は可視的および不可視的両者の事象の組み合わせが、関心が高い場合になされていることを示していると考えられる。また、関心が低い場合には季節を感じる機会の要素が少ない。自然・季節に対する関心に基づく事象が詩表現で用いられる傾向があり、関心のさらなる多様化は詩表現の多様化に関わると考えられる。

さらに、イメージの変化が意識の変化に関連することから（塩俵・安藤 2013）、様々な季節を感じる機会の獲得によりイメージを構成する要素が多様化することによって、着眼点が多様化し言語活動要素の多様化と結びつく可能性が考えられる。中学生では、季節を認識する指標として気象変化をもっていることが、四季の気候事象への着目と関わっている（齊藤 2003）。これは、一年の季節認識の総体に季節の移り変わりを認識していることが関わり、理解することが難しい不可視的事象にも着目されることを示している。それゆえ、一年を通した連続的な学習活動およびその支援のなかで、季節やそれを包含する気候の認識の育成、ならびに表現活動の深まりが期待されると考えられる。

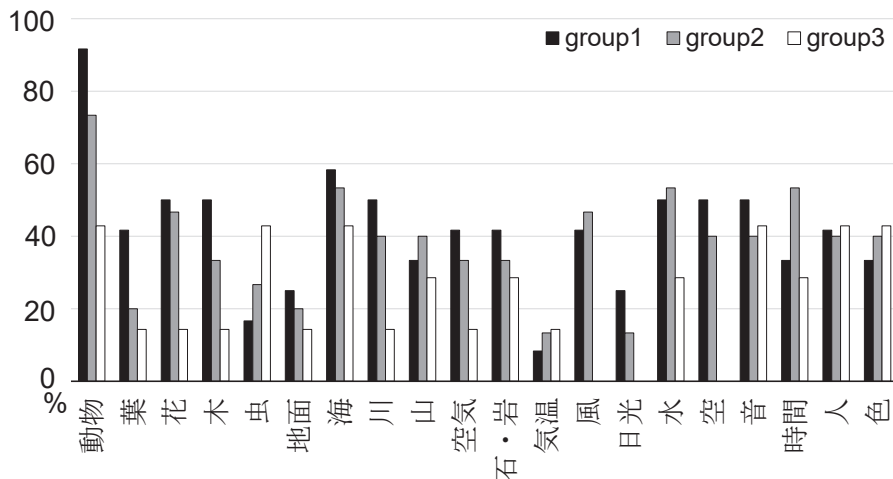


図7 類型ごとの関心事象の回答割合
値は各類型の総人数に対する百分率である。

また、体験の内容としては自然に対する関心が高い児童ほど家庭での体験が多い。したがって、季節を感じる具体的体験機会を言語表現とも結びつけるよう表現の背景に広がりをもたせ、学校活動以外にも気づきが獲得でき、季節のイメージを豊かにする支援が必要であると考えられる。

6. まとめ

本研究では、情報発信に関わる表現と季節認識の関係をとらえるに当たり、小学5年生の言語活動の一つで情緒表現が重要な詩の表現と季節認識の関係から、情緒表現有成の手がかりを把握した。得られた結果は以下のようにまとめられる。

季節・自然に対する関心と情緒をクラスター分析により、3つに類型化した。自然に対する関心が高く、季節に対してポジティブな情緒を持っている場合（group1）、季節・自然に対する関心および季節への情緒の最下位得点割合が他の類型より大きい場合（group3）、関心の高さの程度や季節の情緒に対する程度が両者の中間的な場合（group2）である。詩表現では、語句（助詞、指示語を除く）は、いずれの類型も各季節で季節名の割合が最大を示すが、group1では、木、花、風、海などの自然を構成する要素の割合が大きい。group2では、季節に関連する語句や擬態語の割合が大きく、夏の詩は生活事象の語句が出現し、group3においても同様の傾向を示す。季節のイメージについては、group1では自然事象の割合が全類型中最大で、group2では詩表現の語句でも夏には生活事象の割合が大きい。group3では自然と生活に関連する記述は他の類型より少ないが、相対的に生活に関連する記述割合が大きい。さらに、関心事象についてはgroup1と2で自然関連事象が大半を占める。一方、group3で生活関連事象の割合が大きく、季節を感じる機会が可視的な植物で割合の極大を示す。

すなわち、季節や自然に対して関心が高い場合（group1、2）と生活事象に関心が高い場合（group3）とも、詩表現で自然事象と生活事象を主体に用い、その多寡は事象に対する関心と関わっていると考えられる。さらに、自然に対する関心が高い場合は、自然環境と触れ合う頻度が高いことや季節を感じる機会が可視的事象や不可視的事象にわたるものの、関心が低い場合には季節を感じる機会が限定的である。したがって、季節や自然について、関心を高め、イメージを豊かにしたり季節を感じる具体的機会を持たせたりすることが、表現の獲得に関わり季節感や情緒の情報発信

に必要である。

文 献

- 井元りえ・妹尾理子・小澤紀美子 2001. 地球温暖化問題意識と環境配慮行動に関する研究—小・中学校教師を対象として—. 日本家政学会誌 51：827-837.
- 内田順文 1986. 都市の「風格」について—場所イメージによる都市の評価の試み—. 地理学評論 59：276-290.
- 加藤佐知子・澤田康徳 2014. 「あつさ」「あたたかさ」に関する児童の気候認識—埼玉県川口市における小学校の例—. 東京学芸大学紀要人文科学系Ⅱ 65：35-43.
- 小島理生・伊藤秀子・藤田恵璽・成瀬正行 1977. 四季に対する子どものイメージの実態とその発達. 日本科学教育学会年会講演論文集 1：57-58.
- 齊藤一生 2003. 秋田県・岩手県における中学生の四季別気象認識. 秋大地理 50：21-24.
- 坂口京子 2003. 社会科成立期における経験主義国語教育の特質：「みんないいこ」読本の検討を中心に. 国語科教育 54：19-26.
- 佐川哲也 2001. 子ども遊びのフィールドワーク. 体育学研究. 46：467-475.
- 佐藤智恵 2019. 領域「環境」における幼児の季節の捉えに関する研究—幼児の語り分析より—. 児童教育学研究 38：117-131.
- 澤田康徳 2008. 社会科教育系科目の受講大学生における自然環境の地域性に関する興味・関心特性. 季刊地理学 60：207-219.
- 塩俣昂平・安藤秀俊 2013. 小学校におけるビオトープを用いた自然体験活動が児童に及ぼす教育的効果—土壌動物・種子散布の指導事例をもとに—. 理科教育学研究 54：189-199.
- 田尻信堂 2011. ESDと世界史教育—環境の視点が世界史に問いかけるもの—. 社会科教育研究 113：95-106.
- 田中耕三 1981. 国語教科書の地理的教材の推移. 新地理 29-2：1-24.
- 中川保敬・草野柊・井福裕俊・小沢雄二・斎藤和也・坂本将基 2019. 自然体験が子どもに与える有効性について—社会教育施設で行われる継続した体験活動を通して—. 熊本大学教育実践研究 36：191-195.
- 藤部文昭 2013. 暑熱（熱中症）による国内死者数と夏季気温の長期変動. 天気 60：371-381.
- 向坊俊・城後豊 2006. 自然体験学習が児童の自己表現力に及ぼす影響. 野外教育研究 10：35-47.
- 山本智一・神山 真一 2016. 現職教員におけるアーギュメント構成能力の実態調査. 理科教育学研究 57：53-62.

Relationship between Seasonal Recognition and Language Activities on Students in Elementary School :

Based on Analysis of Poems for Fifth Grade Students

TAKAHASHI Moe,^{*1} SAWADA Yasunori^{*2} and MAKIOKA Toshio ^{*2}

Geography

(Received for Publication; August 24, 2020)

Abstract

At first, this study identified seasonal recognition by conducting a questionnaire survey at an elementary school with fifth grade students in the city of Koganei, Japan. This study clarified the relationship between students' seasonal recognition and poetry expression (language activities). Their seasonal recognitions were categorized into three groups using cluster analysis on the five level scores obtained from their interest in nature and seasons and seasonal emotions. In Group 2, students showed high interest in nature and positive emotions. In Group 1, students showed higher interest and emotions than Group 2, and students in Group 3 showed low interest and emotions. Regarding the poetry representation, the ratios of seasonal names (spring, summer, autumn, and winter) were the highest in each group and season. In Group 1, the ratio was large for the elements of nature such as trees, flowers, wind, and sea. In Group 2, the ratio of mimetic words related to seasons was large, and for summer, their living event words indicated a high ratio. Group 3 had a high ratio for their living event words for all the seasons. Out of the interesting events, the natural events showed a high ratio in Groups 1 and 2. Living events showed a high ratio in Group 3. In Group 3, many students had less chance of feeling the seasons. Therefore, this study highlights the importance of raising students' interest in seasons and nature and providing them concrete opportunities to feel the seasons.

Keywords: seasonal recognition, language activities, poem, elementary school students

^{*1} City of Wako (1-5 Hirosawa, Wako-city, Saitama, 351-0192, Japan)

^{*2} Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)